

より京に歸る時に、雨中に此を過ぎて、馬の鈴の聲を聞いて、雨淋鈴曲を作られた處で、事は鶴林玉露に載つてゐる。曰く小説に載せてあるが、明皇が蜀から京に還らるゝとき、雨中に此で、馱馬の帶ぶる所の鈴聲を聞いて、黃旛綽に謂うて曰はるゝには、鈴聲が頗る人の言語に似てゐると、旛綽對へて曰ふ、三郎郎當、三郎郎當と謂ふに似てゐますと、明皇は愧ぢ且つ笑うてゐたとある。明皇は後、樂工の張野狐をして雨淋鈴曲を製せしめたのである。此の事は已に本卷三三葉馬鬼懷古の詩の、巴山夜雨の條下で詳説しておいた。三郎は明皇の事で、又快活三郎といふ郎當は、頽唐の貌で、勢の衰へたるさま、又しほたれて見すばらしき貌といつてもよい。此の詩、原と二首あつて、其の第一首には、直ちに此の事が詠せられてゐる。然して其の後半に、却使青驪行萬里、三郎當日太郎當といつてある。茲に講ずる所は、其の第二首である。

武連縣南雲氣遮郎當驛北石槎枒西風盡白日

濛濛雨開遍空山白芨花

(字解)武連縣は新唐書地理志に「劍州普安郡に屬す」とあり、漁洋の秦蜀驛程後記には「武連驛は武連の故の縣である。本の名は武功である。秦定年間に武連縣を梓潼に改めた」とある。漁洋は四月二十一日に此の驛に著いた雲氣については、秦蜀驛程後記に「人が雲氣の中を行けば、濛々として衣を沾す」といつてある。然して更に語を繼いで云ふ「四十里にして上亭舖に食した。古の名は郎當驛である」と槎枒は杖枒とも書く、樹の枝の歧れて出てゐるをいふ。夫より縦横に交はつてゐるをいひ、此には之を亂石の嵯峨たるに用ひた。白芨花は白及とも書く、和名をシランとか、シユランとかいふ。蘭科の多年生草本で、人家に植ゑて花を賞する。葉は長く、濶さ一寸餘り、平行脈で、縦に皺が多い。夏月、莖を生じて、三四葉互生し、上に數花を開く。紅紫色又は白色である。漁洋の隴蜀餘聞には「白芨花は、

白色五瓣で、瓣の中に苞があり、白質に紫點があつて、内より黄色の鬚を吐いてゐる。極めて玩ぶべきである。武連、梓潼の間の山谷に多くある」といつてゐるから、此處に在るは、其の白色のものゝみであるらしい。

(意義)武連縣の南は、雲の氣がぼうつと遮つてをり、郎當驛の北は、巖石が縦横に錯雜してゐる。西風が吹いて、終日濛々として降る雨の中に、空山の白芨の花が遍く開き満ちてゐる。

(評説)漁洋の隴蜀餘聞に云ふ「予嘗て陳白沙の詩の、恰○到○溪○窮○處○山○山○積○穀○花○楊○夢○山○の○詩○の○常○記○任○家○亭○子○上○連○翹○花○開○共○銜○杯○といふを喜んでゐる。皆未だ前人の道及を経てゐないものである。因て絶句を得て云ふ、西風盡日云々」と。蓋し粉本は白沙夢山に在るが、漁洋自ら翻化し得たりとしてゐる作であつて、真に風調が諧和で、幾度誦しても飽く事を知らない。

漢州紀夢

(題意)漁洋は四月二十七日、漢州に午食した。漢州は唐の時に置かれ、清に至り四川成都府に屬したが、民國に至り改めて廣漢縣とした。漁洋身已に老いて、遠く萬里の客となつた。思郷の情の轉た切なるものゝあるは當然のことである。夢を紀するの作が出来た。

照壁孤檠不自聊。隔窗寒雨打紅蕉。驚回一枕鄉園夢。身在西川金雁橋。

(字解)檠はとほし火。聊は頼也。樂也と註す。やすんずと訓する。紅蕉は一に美人蕉といふ。和名をピジンセウ。又はヒメバセウといふ。暖地の産で、寒さを畏れる。芭蕉に似て、小さく、葉も狭く短い。花は朱色で、形が裏荷の花の如く、三寸許で、左右に互生すること四五寸に及ぶ。盆栽として玩ぶによい。西川は、今の四川の西部をいふ。唐の肅宗が成都を改めて南京とし、二つに分つて劔南と西川として節度使を置いた。宋は西川路といふを

置いてゐた金雁橋といふは漢州の洛縣の東の雁江の上に懸つてゐる橋である。俗傳に曾て金雁がゐたから名づけたのだと曰つてゐる。
(意義)壁を照す孤燈の影も寂しく、自ら頼りとし安んずる所もない。窗を隔て、寒い雨がしとくと、美人蕉の葉を打つ音が聞える。一と眠りした枕の故郷の夢が驚き醒むれば、身は依然として西川の金雁橋の旅の館に横たはつてゐる事であつた。

(評説)會心偶筆に云ふ旅邸の孤燈に、夢は自ら成り難い。幸にも一夢を獲て、倏ち郷園に至つた。是も亦、客中の佳況である。奈んともすることの出来ないのは、又、蕉雨に驚き醒されて仕舞つて、身の西川に在ることを知り、轉た自ら聊んせざるの情味をして、彌々深からしめるのみである。

洛川南望

(題意)漁洋は、四月二十八日に、諸官僚に迎へられて成都に入つた。前の

康熙十一年壬子より數ふれば、既に二十五年目である。祭告の事も果て、成都を出發して歸途に就いたは、五月十六日であつた。復た往路を取つて、棧道の險をも過ぎ、咸陽より長安に抵り、潼關を過ぎて洛陽に入つた。秦蜀驛程後記の七月初四日の條に云ふ洛水に傍うて行けば、水北は邙山、水南には伊闕、伏牛の諸山を望み見る。其の東には即ち少室、太室の諸峰が天表に秀出してゐると、又云ふ偃師縣に抵る。商の西亳である。其の南は緱山で、王子晉の祠がある。其の西北が邙山で、高處を首陽といふ。即ち夷齊の馬を叩へた處で、祠廟がある。

碧。嵩。清。洛。洗。愁。顏。伊。闕。中。分。兩。髻。鬢。煖。翠。浮。嵐。
看。不。盡。緱。山。南。是。伏。牛。山。

(字解)碧嵩は、碧色をなした嵩山である。嵩山は嵩高ともいふ。五獄の一で、河南登封縣の北に在る。古は外方ともいひ、亦太室ともいつた。其の西を

少室といふ相去ること十七里である。嵩高といふは其の總名である。元和志に嵩高山は高さ二十里、周りが一百三十里あり、少室山は高さ十六里、周りが三十里あるといつてある。清洛は清らかな洛河をいふ。洛河は陝西雒南縣の西北冢嶺山から出て、東に流れて河南に入り、盧水、永寧を經、又東北して宜陽、洛陽、偃師、鞏縣を經、澗、瀍、伊の諸水を納れ、洛口に至つて河に入る。韋莊の北原閒眺の詩に、千年王氣浮清洛、萬古坤靈鎮碧嵩とあるから、其の文字を採つたのである。伊闕は水經注に昔大禹が疏して以て水を通したが、兩山相對して、之を望めば闕の如く、伊水が其の間を歷て北に流れる故に、之を伊闕と謂ふとある。髻鬢の髻は音ケイで、髮を總べて頂に束ねたのをいふ。もとよりとかたぶさとか訓する。此處は山の形を喩へて言つたのである。鬢は髮を環の如くして飾としたので、わけと訓する。是も亦山の形を喩へていつたのである。髻鬢と續けて、山のことを用ひる。即ち髻鬢の如き形した山といふのである。媛翠浮嵐

は、黄山谷の詩に、有人半夜出山去、頓覺浮嵐暖翠空とある。翠は青標色のこと、山の色をいふ。嵐は山の氣をいふ。即ち暖かさうな山の綠色、浮べる様な山の氣といふことである。嵐をあらしと訓し、暴風のこととするは、我が國で誤用したもので、此の字の本義でないから、詩には然様な意義に用ひたものも無く、又用ひてはならぬ。緱山は緱氏山ともいひ、緱嶺ともいふ。偃師縣の南に在る。王子晉が七月七日に白鶴に乗つて來て、山の嶺に駐り、手を舉げて時の人に謝して去つた處だと言ひ傳へられてゐる。伏牛山は嵩縣の西南三百里に在つて、唐の自在禪師が道を修した所である。前の題意の下にも、洛水の南に、伊闕、伏牛の諸山を望み見るといふ驛程後記の文を引いておいた。

(意義) 碧を凝せる嵩高、清く流るゝ洛河、何れも我が愁はしき顔を洗ひ去る様で、伊闕の山は中程より分れて兩つの山となつてゐる。暖かき山の翠、浮べる山の氣は、看れども盡くる時を知らぬ。緱氏山の南に續いてゐ

るのは是れ伏牛山である。

〔評説〕這等の詩、たゞ渾然としてゐて、何等言説を用ふべき所がない。初學の人は日夕よく諷誦して、其の妙味を會得すべきである。

宋陵

〔題意〕漁洋は七月初五日鞏縣を過ぎた。此に宋の太祖の昌陵より、哲宗の泰陵に至る迄の七陵がある。

洛水邛山飽廢興。宋家幽寢闕魚燈。奉香不見臨安使。白日茫茫下七陵。

〔字解〕洛水、邛山、何れも前詩の註に出てゐる。廢興は、すたれたり起つたり、盛衰と同じ。宋家は宋の帝室のこと。幽寢は陵寢のこと。陵にある祭舎をいふ。闕はとざすと訓す。閉の字の意。又暗いとか、深くかすかな意味を

も持つてゐる。魚燈は、秦の始皇本紀に「人魚の膏を燭とした。久しく滅えざる様に度つたのだ」とある。臨安は今の浙江杭縣である。宋の高宗が南に江を渡つたとき、此處を建て、都とし、臨安府と稱した。白日は明かなる日影。茫茫は廣々とした意であるが、其より取り止めなく、明かならざる貌として用ひる。七陵のことは、秦蜀驛程後記に「太祖の昌陵より、哲宗の泰陵に至る七陵は、輩に在る」と出てゐる。今一々之を列擧すれば、太祖の永昌陵、太宗の永熙陵、眞宗の永定陵、仁宗の永昭陵、英宗の永厚陵、神宗の永裕陵、哲宗の永泰陵である。

〔意義〕洛水や邛山は、飽くまでも、世の興つたり廢れたりした事を経盡してをり、宋の帝室の陵は、魚燈の光も明かならざる有様である。臨安より勅使が來て、祖宗の寢陵に香を薦めて祭るなどいふ事も絶え果て、仕舞つて、白日の影も茫茫として、七陵に下つて明かに照さぬは、誠に痛ましき限である。

(評説)陶宗儀の輟耕錄の中に、發宋寢陵と題して楊璉真珈といふ者が、徒を帥ゐて来て、趙氏の諸の陵寢を發き、支體を斷殘し、珠襦玉柙を擡み出し、其の齒を焼き骨を草叢の中に棄つるに至つたので、唐珣字は玉潛といふ者が之を歎いて、里中の少年を誘うて收藏した事が録してある。尙ほ、唐の作つた詩の中に次の一首がある。

珠●鼻●玉●雁●又●成●埃●斑●竹●臨●江●首●重●回●猶●憶●年●時●寒●食●節●天●家●一●騎●奉●香●來●

漁洋の詩、或は此の詩あたりから胚胎して來たのであるまいかと思はれる。因て茲に附記した。

夕陽樓

(題意)李義山に夕陽樓の詩がある。其の自註に「榮陽に在る。是は知る所の今の遂寧の蕭侍郎が、榮陽に牧たりし日に作つた」と云つてある。漁洋は七月初七日、榮陽縣に午食し、鄭州に宿してゐる。

野塘菡萏正新秋。紅藕香中過鄭州。僕射陂頭疎雨歇。夕陽山映夕陽樓。

(字解)野塘は野の中の池をいふ。塘はつゝみと釋するが、又池の事をもいふ。菡萏はカンタンと讀む。爾雅に「其の華は菡萏」とある。然し精しく謂へば、荷の未だ發かざるを菡萏と爲し、已に發いたのを芙蕖とする。即ち蓮の蕾である。尙ほ因に其の他の名稱をも茲に擧ぐれば、其の莖は茄、其の葉は葭、其の本は莖、其の花は菡萏、其の實は蓮、其の根は藕、其の中は荷、荷の中は蕙である。紅藕は紅の蓮の花をいふ。藕は耦の意で、一花一葉が對耦して出るから此の名があるといふ。鄭州は今は鄭縣となつてゐて、河南開封道に屬し、開封の西方約一百二十里に在る。僕射陂は、秦蜀驛程後記、七月初八日の條に「鄭の東五里に僕射陂がある。後魏が以て僕射李冲に賜うたから、因て陂に名づけた。廣さが十餘頃あつて、水光鑑すべきで

ある。岸を夾んで皆垂柳があり、白蓮は正に花がさいて、清芬が人を襲ふ。管に萬柄のみではないとある。僕射は官名で、ボクヤと讀む。陂は音ヒで是亦池の事である。

(意義)野の池は蓮の花が咲いて、正に新秋である。紅蓮の佳い香のする中を通つて、鄭州を過ぎた。僕射陂のほとりは、疎な雨が歇んで、夕日に照された山の色が夕陽の樓に映つてゐる。

(評説)此の夕陽樓といふは、蕭侍郎名は滌といふ人が建てたので、滎陽は唐の頃の鄭州である。即ち蕭滌は、文宗の太和七年に給事中より、鄭州刺史に轉じて、此に來り此の樓を建てたが、後、召し還されて刑部侍郎となり、同九年罪を得て遂州司馬に貶された。此の時義山は其の夕陽樓に上り、限りなき感慨を以て一詩を賦したのである。然し義山の詩は明々白地に之を説破してをらぬ。其所に盡きない所の妙味が含まれてゐるのである。其の詩は

花明柳暗繞天愁。上盡重城更上樓。欲問孤鴻向何處。不知身世自悠悠。

漁洋原より此等の事を熟知して、此の地に來つて詩を賦す。然も一字の之に言ひ及ぼしてゐるものがなく、たゞ夕陽山映夕陽樓の一句に之を含蓄させて仕舞つてゐる。是も亦謂はゆる別材の一であつて、彼の性靈一派の人々が、漁洋を以て才力薄しと謂つて謗るが、漁洋の才力は、是等の人々の謂ふ才力以外に於て、別に一種の才力を認めねばならぬのである。漁洋詩話に「鄭州の夕陽樓は、李義山の詩がある。余も之を過ぎて詩を題して云ふ、云々と。蓋し是亦漁洋自ら得意とする所の作であつて、義山の詩以外に、別に妙味が存してゐる。

更に一言せん。此の詩例の如く夕陽樓の字面の面白い所から著想したものである。併し、夕陽山映夕陽樓の如き句法は、動もすれば宋人の調子に陥つて、たゞ口調のみが善くて、深い意味が無くなつて仕舞ふ。學詩者の注意せねばならぬ所である。杜鵑花發杜鵑啼、とか、燕子飛回燕子花。な

ど、其の類例は一々枚舉する事が出来ない。

漁洋は七月二十四日を以て、郷里なる山東新城の家に歸つた。其の旅行日記秦蜀驛程後記は是で盡きてゐる。然して九月に至り京師に復命した。二月初三、初めて京師を出發してから、七月下旬、郷里に歸るまで、實に半年を費した。其の間行程萬里、雨に打たれ風に吹かれて、具さに艱苦を嘗めてゐる。交通の不便なりし當時の行役、六十三歳の老軀を以て之に當りしことは、實に推察するに餘りある。是の役に於て詩を獲ること百餘篇、編して雍益集と名づけた。漁洋が其の門人盛符升に寄せた書の中に云ふ、再び秦蜀に使用して、詩を得ること纔に百餘篇であるが、皆寥寥たる短篇で、復た當年の蜀道や南海の豪放な格は無い。然れども覽古興懷の江山の助を得て、生色の加はるものがある。蘇眉山の集の中に分けてある所の、紀行、游覽、古蹟、寓興の諸篇は、殆んど兼ねて之を有してゐる。とある。是等の語を聞いては吾が漁洋も亦老いたりの感を抱かずにはを

られない。

答鍾聖輿送芍藥

(題意)鍾聖輿といふは、名を輿といひ、聖輿は字である。北直の人であるが、父の文子といふが、濟南府推官となつたから、遂に移つて此に家した。漁洋が康熙二十五、六の兩年家に居たとき、來つて門に入つたが、實かに流俗を抜いてゐた。其の才、諸家を兼ね、或は奇特峻峭で、孟東野に似てをり、或は芊綿清麗で、當時に盛稱せられ、又西崑の三十六體に似てゐる。著はす所の蒙木集は、漁洋が序してゐる。此の詩は、漁洋の蠶尾續集に收めてある所のもので、集は康熙三十四年乙亥から、四十二年甲申迄の作を録してあるが、精華録は三十九年庚辰で止まつてゐる。又聖輿は乙亥の歲に京師に來り遊んで、豊臺の芍藥の詩を賦してゐるから、此の詩恐らくは其の時位に出來たものであらう。漁洋時に

六十二歲。

新○綠○橫○窗○穩○畫○眠○一○簾○微○雨○似○輕○煙○午○晴○睡○起○
維○摩○榻○花○氣○熏○人○又○破○禪○

(字解)維摩は菩薩の名で、吳音に従つてユキマと讀む。維摩詰といふを略したのである。維摩詰といふは、淨名といふ意味で、淨は清淨無垢なるを謂ひ、名は名聲が遠く布くを謂ふ。維摩經の中に云ふ、毗耶離大城の中に長者があつて、維摩詰と名づけてゐた。方便を以て、身に疾あるを現じて、牀に寢てゐた。と榻といふは、牀の狭くて長いものをいふ。腰掛とか、寢臺とか謂ふ類である。禪といふは、梵語の禪那といふを省いたので、思惟修と譯する。靜慮、即ち專心守一にして、諸の繁累を斷ち、普智、即ち明心達理の境に到ることである。今少しく平易に解すれば、心を一境に住めて、妙理を冥想するをいふ。

(意義)若葉の緑が、窗のあたりに横たはつて、晝の眠も穩かである。一つの簾に降りそゞぐ微かな雨は、輕き煙に似てゐる。午の頃になつて空は晴れて行き、維摩の榻の睡から醒めて起き出づれば、芍藥の花の薫りが人を熏するのに心が移つて、端なくも禪に入つてゐた我が慮が破れて仕舞つた。

(評説)花氣に熏せられて、禪の破れた所に、却りて多くの禪味がある。此の詩、漁洋の雍益集には、雨後門人鍾聖與、送芍藥、報謝二首と題してあり、今一首。

十年不復過豐臺、多負花時激盞杯。愛爾清才如小謝、故吟紅藥遣春來。といふのが前にある。且つ此の詩も、午晴の字が晚晴となり、熏人の字が撩人となつてゐる。併し此の結句は、黃山谷の花氣熏人欲破禪、といふ句から來てゐるのであるから、熏人とした方が善い様である。尙又此の詩眠と睡と、同訓の字が出てゐる。併し一讀の下、殆んど之を覺えない。古人

の集中にも亦此等の事を往々見受けるが、初學にありては尤も避くべきである。

解詳 漁洋百絶の終に

以上、王漁洋の絶句百首の講義を終了した。成るべく初學の人に分り易くと思つて、煩はしく反覆して解説したが、文字語句の解釋こそ詳細にも出来るが、其の妙處に至つては、何うしても説く事が出来ぬ。因て更に最後に於て、漁洋の詩説の解釋を試み、之に附け加へて作詩上心得べき事項を述べて、此の講を終る事とする。漁洋の詩説は屢々之を述べたが、謂はゆる神韻の二字である。此の神韻の字の意義に附ては、辭書には、或は風神氣韻であるとし、或は高尚なる風度とか、けだかさふり等と言つてあるが、甚だ分明を缺いてゐて、未だ十分と謂ふ事が出来ぬ。然し之を平易に、何人にも分り易く説く事は、甚だ難かしい事で、寧ろ意を以て解すべくして、言葉を以て解すべからざるものであるかも知れぬ。我が師

服部擔風先生は、嘗て予の間に對して答へて曰はるゝには、

神韻とは文字以外に於て、勝れたるひゞきのあるをいふ。

と。然して更に曰はるゝやうに、然らば文字以外の勝れたる響とは、如何なるものかと言へば、夫は明かに言ふ事が出来ぬ。漁洋あたりの詩を讀んで、自ら悟るより外は無いと。是等の點に至つては、漁洋の言葉にも「嚴滄浪は禪を以て詩を喩へたが、余は深く其の説に契はせる」といつてゐる通りで、詩は禪と同じく、自ら悟るより致し方の無いものである。漁洋はまた、司空圖の「不著一字、盡得風流」といふ語を擧げて「詩境を形容して、絶妙である」と言つてゐるが、何事に因らず妙處といふものは、心を以て心に傳ふべきもので、言語を以てしては傳へる事の出来ないものである。乃ち彼の、

妙の字は少き女の辭れ髪、いふにいはれず、とくにとかれず。
と謂つてゐる如くである。

漁洋が神韻の語を用ひたのは、何時の頃よりか分らぬが、其の詩名を揚ぐるに至りし頃は、既に之を標榜してゐたのであつた。然して其の壯年揚州に居て、長男の啓諫が初めて家塾に入つた時、自ら摘録して授けた所の詩集をば「神韻集」と名づけたのであつた。神韻の語は、漁洋自ら獨創と信じてゐたらしいが、後年に至つて、明の孔文谷が既に唱道してゐる所である事を知つた。漁洋の著はす所の池北偶談に云ふ、汾陽の孔文谷天允云ふ、詩は以て性を達するが、然し須らく清遠を尙しとすべきである。薛西原が詩を論ずるは、獨り謝康樂、王摩詰、孟浩然、韋應物を取る。言ふ、白雲抱幽石、綠篠媚清澗、謝靈運は清である。表靈物莫賞、龜真誰爲傳、謝靈運は遠である。何必絲與竹、山水有清音、左景昇鳴禽集、水木湛清华、謝靈運は清と遠とを兼ねたのであると總じて其の妙は神韻に在ると、即ち神韻は清と遠との總稱であるとしたのだ。漁洋は文谷を以て神韻説の最初のものとしたが、併し孔文谷より以前に、既に胡應麟の詩藪に此の語

を用ひてゐる。曰く「曹子建の明月照高樓、流光正徘徊、神韻が迥出してゐるが、實に謝靈運、謝玄暉が端を造してゐる」と、其の謝靈運の句といふは、清輝能娛人、游子澹忘歸、といふのであるし、又謝玄暉といつたのは別に子建の凝霜依玉除、清風飄飛閣、といふ句が、其の金波麗鵝鵲、玉繩低建章、を祖したのだといふのである。應麟又云ふ、孟浩然的五言の、甚だ偶に拘らないものは、自ら六朝の短古であつて、加ふるに聲律を以てしてゐるから、即ち神韻の超然たるを覺える。又唐初では、惟だ文皇の帝京篇が、藻瞻精華で、最も傑作とする。梁陳に視べて、神韻が少しく減じ、富麗が之より過ぎてゐる等、一々擧ぐるに勝へぬ。漁洋が之を知らぬ事もあるまいが、或は自分の心に未だ神韻とするに足らぬと思つたのであらうか。然して其の詩風の因る所は何れにあるかといふに、夫は唐代の王維、孟浩然あたりである。其の選ぶ所の唐賢三昧集は、其の詩説を例證した所の

ものであつて、其の卷中に王維をば百十一首取り、孟浩然をば四十八首取り、其の他に王昌齡は三十五首、李頎は三十六首、岑參は三十八首といふ風で、王維が第一位を占めてゐるが、李白や杜甫は全く取つてをらぬ。随つて其の詩風は袁隨園の評した如く「先生の才は本と清雅で、氣に排慕が少ないから、王孟韋柳たるには餘りがあつて、李杜韓蘇たるには足らぬ」といふは公論である。漁洋自ら三昧集に序した文は、其の旨趣を知るに足るべきものであつて、一讀しておく必要があるから茲に摘録する。曰く

嚴滄浪は詩を論じて云ふ「盛唐の諸人は、唯だ興趣に在る。羚羊が角を挂けた様で、跡の求むべきものがない。透き徹つて玲瓏として、湊め泊める事が出来ない所は、空中の音相中の色、水中の月、鏡中の象の如くで、言葉の盡くることはあつても、意の盡くることは無い」と。司空表聖は詩を論じて亦云ふ「妙は酸鹹の外に在る」と。康熙戊辰の春の杪に、京

師から歸つて宸翰堂にゐて、日に開元天寶の諸公の篇什を取つて之を讀んで、二家の言葉に于て別に心に會する所があつたから、其の雋永超詣なるもの、王右丞よりして下、四十二人を録して、唐賢三昧集とし、釐めて三卷とした。

とある。即ち漁洋の此の集は、滄浪、表聖二家の詩論を基として、別に心に會する所があつて、雋永超詣なるものを取つて、其の主張する所の神韻を指示したのである。

以上説く所の外、漁洋は神韻を例證する爲に、司空圖の詩品の語を引き、中にも特に、不著一字、盡得風流、と采采流水、蓬蓬遠春、とを摘出し、其の他戴叔倫の、藍田日暖、良玉生煙、とか、蘇軾の、空山無人、水流花開、等の語を引いてゐるが、何れも讀者をして神韻といふ妙趣を意解せしめんとするので、言解すべきものでないとしてゐるのである。蓋し漁洋の取りし所の方法は、頗る當を得たものであるが、是丈では初學の人を悟了せしめ

る事は覺束ない。されば余は余の心に會する所に據つて、成るべく之を平易に解釋して見ようと思ふ。然して夫は必ずしも神韻の語の眞義を開發しようとするのではなく、たゞ學詩者の心得べき事柄を説明しようとするのみである。

詩には格調派と性靈派とがある。格調派とは、詩の格律を高くし、風調を善くするものであつて、性靈派とは、天然に具つてゐる所の勝れたる性、即ち心中にある所の正しき思想を、主として寫さうとするものである。格調派に在つては文字語句に注意し、音調を整へる事に力を用ふるから、寫し出した所の思想は、動もすれば陳腐とか空疎とかに陥る様な事がある。之に反し性靈派は思想に重きを置くから、自然に新奇を競ふ様な事になる。新奇といふは一時的のもので、永久的の者でないから、其の作は、一見して人を驚歎せしめるに足るが、再讀する時は既に新奇でなくなつてゐて、遂に嫌氣を生せしめるものである。格調派の詩は着想は

陳腐であつても、調子が善いから、諷誦してゐる間に、覺えず引き入れられて、感興を催し來るが、性靈派の詩は一たび嫌氣を生ずると、再び讀む氣になれぬ。性靈派の首領ともいふべき袁隨園が、生前には一世を風靡してゐたにも關らず、死後俄に聲價を墜して仕舞つたのは此の故で、其の甚しき者に至りては、生前に隨園門下士といふ印章を捺してゐたが、其の死後、悔作隨園門下士と雅印を改むるに至つたと儒林瑣記に出てゐる。然らば神韻といふは此の格調、性靈の兩者に比して何うであらうかといふに、神韻は寧ろ格調派に近い。本卷二十七葉に翁覃溪の説をも載せて置いたが、茲に重ねて詳説しよう。曰く格調は主として文字語句に依つて音節を善くするのであるが、神韻は文字以外に更に餘韻あるをいふ。漁洋が愛好してゐる所の姜白石の詩説に「句中に餘味あり、篇終つて餘意あり」といふは、略ぼ神韻を説明してゐる。前に掲げた我が師の「文字以外に勝れた響きのあるをいふ」といふも亦是である。王懋の野客

叢書に「意が筆墨の外に在る」と云つてゐるのも、亦他の方面から説明したもので、漁洋は之を評して「此の語、詩文の三昧を得てゐる」と云つてゐる。

然らば如何にして神韻を詩中に收容すべきかといふに、孔文谷の説に據りて、清と遠との二つとせば、清は氣品であり、遠は餘韻である。然して氣品といひ、餘韻といふも、共に内容方面の著想と、形式方面の措詞と造句とより外に無い。其の内容方面の著想といふは、古詩や律では専ら之に重きを措かなければならぬが、七言絶句は原と歌ふ爲のものであるから、寧ろ調子を善くする必要があるので、著想よりも措詞造句の方面を第一にせねばならぬ。著想の方面では、必ずしも新奇なるもので無くとも、眼前の景、口頭の語といふくらゐのもので可い。若しも言ひたい事柄があつたならば、轉句に於て之を片付け、結句はすらりと收束する。殊に之に對する感想の如きは、全然之を讀者に委托して、作者は之を言は

ずに措けば、却りて各自に感興を惹起して、謂はゆる餘情餘韻の盡きないものとなる。かく思想の方面には重きを置かず、措詞造句等に多量の力を用ひるから、漁洋の詩には本書下卷七十五葉表に掲げておいた陳康祺の如き攻撃が始まるのである。次に措詞の上には、雅馴な文字を取らねばならぬ。雅馴な文字とは、屢々詩中に使用せられたもので、世俗に用ひられてゐないもので無ければならぬ。然して人の餘り使はない奇僻な文字も亦良くない。之を器物に喩へて言へば、磨きが掛つて、光澤のあるものが良い。言ひ換へれば、能く使はれてゐるが、惡擦れのしてゐないものが佳いのである。次に造句の方面に就いて、漁洋の絶句を精査すれば、轉句は反り讀をしてゐるものが多いが、結句は多く反つてゐない。縦合反つて讀んでも、夢江天とか、似漢南といふ如く、下三字の處で反るのみである。若し結句に於て甚だしく反り讀をする場合は、轉句に於て讀み下しの句法を用ひる。千載秦淮鳴咽水、不應仍恨孔都官の如き

である。若し結句が讀み下しになつてゐたならば、轉句は成るべく、反り讀にせねばならぬ。晚趁寒潮渡江去、滿林黃葉雁聲多の如きである。若し又轉結二句共に讀み下しの句法であつたならば、必ず其の中に細かく刻む語を入れるべきである。行盡清溪三百曲、東林纔打午時鐘の行盡、纔打の兩語は謂はゆる細かく刻んだものである。起承二句は轉結程に重きを措かずして宜しけれども、成るべく同一句法にならぬ様注意せねばならぬ。造句の方面は種々變化があり、必ずしも茲に言ふ如く一律には行かざれども、成るべく句毎に變化ある様に注意を拂はなければならぬ。以上はたゞ七言絶句として調子を善くする方法を述べたので、是等諸法を併せ用ひれば神韻は得られるであらうと思ふ。

最後に更に一則を附記する。漁洋の語に「詩の道には、根柢があり、興會がある」といつてゐる。其の根柢に就ては、之を風雅に本づけて、以て其の源を導き、之を楚騷や漢魏の樂府詩に派らせて、以て其の流を達せしめ、之

を九經三史諸子に博めて、以て其の變を窮める」といつてゐるし、興會に就ては「鏡中の象、水中の月、相中の色の如く、羚羊は角を掛けて、跡の求むべきものが無い」といつてゐる。然して更に云ふ「根柢は學問に原づき、興會は性情に發する。斯の二つの者に於て之を兼ね、又幹らずに風骨を以てし、潤すに丹青を以てし、諧ふるに金石を以てする。故に能く華を銜み、實を佩び、大いに厥の詞を放つて、自ら一家として名づけられる」と、即ち學問の根柢を作つて、興會に乗じて詩を賦し、次第に進めて往つたならば、遂には一代の大家となつて、其の詩は千載に傳はる様になる。果して此くの如き處まで到るを得たならば、詞家の能事は了つたのである。

詳 漁 洋 百 絶 終

以漁洋山人精華錄贈加藤月村老兄乃賦古詩一篇爲副。

清初文物尤隆昌。於詩我仰新城王。秀句與會拈神韻。千古格調擅其長。論詩冥契嚴子羽。妙悟禪悅同規撫。公論一代推正宗。而今誰復議家數。明湖秋柳麗藻新。紅橋修禊賦冶春。蜀道南海老蒼筆。不著當年軟紅塵。却怪倉山狂居士。謾以才薄試詆詆。自家文章果如何。千秋大業遊戲視。愧吾問學未溯源。廿歲困苦抵觸藩。雖無一字傳身後。寧忘忠孝旨溫敦。山人風姿似海鶴。畢生私淑亦罔作。家集浩澣涉獵難。精華一錄宜咀嚼。羚羊挂角不吾欺。別才別趣或獲之。願向帳中同此祕。與君聊贈阮亭詩。

雅堂達致民舊製

324

586

昭和四年十一月十一日印刷
昭和四年十一月十五日發行

愛知縣名古屋市中區小川町長壽寺内

編輯兼 辻 市治 郎

岐阜縣岐阜市七軒町十二番地

印刷者 河田 貞次 郎

岐阜縣岐阜市七軒町十一番地

印刷所 四邊印刷株式會社

愛知縣名古屋市中區小川町長壽寺内

岐阜支店

發行所 雅聲社

振替口座名古屋五四三二番

終